

住井すゑとその文学の里(六十二)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

『橋のない川』連載・部落問題研究所発行の月刊雑誌『部落』に全22回

京都市下京区七条通間の町東入材木町にある部落問題研究所の常務理事A氏は、部落解放それ自体を主題にすえた作品を書いてくれる作家の出現を待ち望んでいた。

A常務理事は、それまでに、多くの部落を扱う作品を読んできた。その中には明治39年(1906年)に書かれ、部落出身の青年教師の生き方を扱い世に問題を提起した島崎藤村の『破戒』があった。だが、『破戒』が著されて50年以上の歳月が経過していた。それに加えて天皇大権(※1)の世から、主権在民(※2)の世になって、『破戒』には、部落解放への思想が弱く、内部の人々に解放の自覚を促し、外部の人々に解放の必然性を理解させられなくなっていた。

住井は、大和(現奈良県)方面での取材の帰途、東京の新潮社に立ち寄り、編集部の佐野英夫に、部落を題材にした作品を書きたいので完成したら出版してほしいと相談し、初めて生活のためでない作品を書こうとして机に向

かった。

折しも、部落問題研究所発行の月刊雑誌『部落』の編集長B氏から、連載してみないかという申し出を受けた。

住井は、佐野との約束もあるし、一般読者の目の届かない雑誌に連載するのは気が進まなかった。

しかし、住井は、考え直した。『橋のない川』を雑誌『部落』に連載してもらって、読者の反応を知ろうと。読者の反応といつても、それは作品への評価ということより、部落の本当の姿が描かれているかどうかということが主だった。

昭和34年(1959年)、雑誌『部落』1月号より、『橋のない川』の連載が始まった。翌35年10月号まで全22回連載で、その触りの部分を抜粋してみた。



『橋のない川』が連載された月刊雑誌『部落』。『橋のない川』が初めて世に出る。犬田家所蔵。

しばらく、いや、もう何年ごし思わずにしまった夫の進吉。その進吉が、今、小溝の向こう側に立っている……。ふでは小溝をとびこえるべく身構えた。とたんに、小溝は滔々たる大河となつて彼女をさえぎった。

進吉は対岸を上流に向いて駆け出す。ふでも上流に向いて走りつづける。

『ああどこかに橋があるはずや。』しかし、川幅は広く、対岸は丈余の雪で、上流にも下流にも橋はない。

ふでは、愛しい夫の進吉にどうして手放しでふでは泣いた。ふでは恋しかった。ただただ、進吉が恋しかった。

『おふで、これ、おふで』
姑のぬいに肩先をたたかれて、ふでは眼がさめた。

『橋のない川』の中の部分部分が切り取られて新潮社から単行本で第一部と銘打って、昭和36年(1961年)9月に2万部発行された。早速第二部が書き下ろされ、同年の12月に1万6000部発行された。翌昭和37年(1962年)には、第一部第二部併



『橋のない川』第1部から第7部。新潮社刊、犬田家所蔵。

せて1万2000部増刷された。住井の許には、多方面から、しかも様々な内容の反響が寄せられた。その中に、長野県の小学校校長の同和教育に関わる手紙と、山陰地方の一農村婦人の娘の結婚についての手紙があった。

『橋のない川』は次々と書き下ろされた。第3部が昭和38年(1963年)、第4部が昭和39年(1964年)4月、第5部が昭和45年(1970年)、第6部が昭和48年(1973年)、そして第7部が平成4年(1992年)9月に出て、第一部から第七部までで公称500万部のロングセラーになった。

※1 大日本帝国憲法の下で

※2 日本国憲法の下で

引用文献 新潮社刊『橋のない川』の第一部より第七部まで。『橋のない川』住井すゑの生涯(北条常久著・風濤社刊)、『住井すゑの世界その生涯と文学』前川む一編・解放出版刊。その他。



『橋のない川』出版記念会。昭和37年12月17日に牛久小学校校舎2階の講堂において開催。主催橋のない川出版記念会。発起人代表牛久町長川村衛。写真は牛久小会議室展示。